THE CHALLENGE: REPORT OF YOUTH MEMBERS

「ナガサキ・ユース代表団」の挑戦

2018 MEMBERS

ナガサキ・ユース代表団
第6期生メンバー

工藤 恭綺（長崎県立大学シーボルト校 国際情報学部 4 年）、酒井 環（長崎純心大学 人文学部 3 年）、孫 明悦（長崎県立大学 国際情報学研究科 2 年）、中島 大樹（長崎大学 多文化社会学部 3 年）永江 早紀（長崎大学 多文化社会学部 3 年）、原田 怜奈（長崎大学 多文化社会学部 3 年）、福井 敦巳（長崎大学 多文化社会学部 3 年）、三浦 大輝（サセックス大学　環境開発学　留学予定）（2018 年 4 月現在）

BEFORE DEPARTURE（出発前）

多角的に学ぶ　三浦 大輝

渡航前の 1 月から 4 月まで NPT 再検討会議第 2 回準備委員会への出席に向けた様々な準備活動を行いました。第一線で活躍されている専門家（国際政治・歴史・NGO の連携・マスメディアなど）をお招きし、多角的な視点から核問題を考え、知識を深めました。また、広島や長崎の被爆の歴史を改めて学んだほか、前年度の NPT での各国の声明文を読み、核問題に対する立場を知りました。どの勉強会も刺激的で、現地での活動に活かすことができました。

ACTIVITIES IN GENEVA
（ジュネーブでの活動）

外交の最前線へ

孫 明悦

4月 23 日から5月 4 日まで 2020 年 NPT 再検討会議第2回準備委員会を傍聴しました。会議では核軍縮・核不拡散・原子力の平和利用について、各国政府から声明が述べられ、それぞれの発言から、国の立場を見ることができました。今回はロシア、アメリカ、シリア政府代表間の議論が白熱し、複雑な国際情勢とその緊張感が感じられました。

また、政府代表だけではなく、若者も含めた NGO の代表も意見を述べました。普段は直接関わることのできない方々と話すこともでき、本やニュースだけでは勉強できない内容を学ぶことができました。国際情勢を学び、実際に会議を傍聴したこと、世界と繋がるとても貴重な経験となりました。

対話を通して感じ、考える

中島 大樹

今回、私たちは 15 カ国の政府の方と対談し、主に安全保障政策や核兵器禁止条約についてお聞きしました。

対話を通して、核の傘の国と非核兵器国の姿勢が特に印象的でした。核の傘の国は核のリスクがある限り、核抑止に頼るという断固とした立場を取っていました。一方で、いくつかの非核兵器国は NPT 自体にあまり意味を見出していないようでした。そのため、私の予想とは違い、核軍縮を強く推し進めるというより、核兵器国の軍縮に対して失望感を抱いていたように感じました。

このような各国の声明文だけでは分からない部分を知ることで、核兵器廃絶に向けてなにが必要かを改めて考えることができました。

国連でプレゼンテーション！

永江 早紀

長崎から来た若者として、世界に発信したかったこと、それは『核兵器』を考えるときに、国境は関係ないということです。

私たちは、73 年前に起きたことは広島や長崎、日本だけの歴史ではなく、地球の歴史として捉えることが大事なのではないかと考えました。今、この時も、私たちは約 14,500 発の核兵器が存在するこの地球で生活しています。あの日の出来事を、『日本が』ではなく『私たち人類が』その被害にあったのだという認識を、プレゼンテーションを通して発表しました。

当日は各国からNGOの方々や多くの若者にも来ていただき、多くの方に私たちの考えを伝えることができました。これからも、この想いを発信しつづけていきます！

長崎の若者のリアルな声を！ 工藤 恭綺

『若者から伝えられること』をテーマにショートフィルム（短編動画）を作成しました。長崎に住む10・20代をここにおける若者と定義し、彼らの核や核廃絶に対する想いや、核の非人道性に対する認識を来場者に伝え、共有し、そして考えてもらいたいという趣旨がこの動画に込められています。現在世界に存在する核兵器数を BB 弾で視聴覚的に体感できるように工夫したり、被爆者の方の想いを組み入れました。

当日は、政府関係者や他国からの学生など多くの方々にご来場いただき、「長崎の若者でも核廃絶が難しいという意見があるとは予想していなかった」「被爆者の方のメッセージを聞いて、核の恐ろしさを改めて感じた」などの様々な声を拾うことができました。また、上映当日は来場者からのフィードバックを用いたアート作品も作成しました。

作成したアート作品「希望の木」

国際機関に学ぶ！国を越えた平和の構築 原田 怜奈

WHO の外観

渡航中、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）、ICRC（赤十字国際委員会）、WHO（世界保健機関）の3つの国際機関を訪問し、それぞれ教育と平和、医療と人道、保険と人権の関係について学びました。

印象的だったのは、彼らが行っている『国』の政治に囚われない、『個人』に焦点を置いた活動です。たとえば UNESCO では、平和教育を『人の心の中に平和の砦を築く』こととし、国策に偏らない教育を目指していると伺いました。ひとり一人、個人で平和を築くこと。私は、これが UNESCO の考える平和だと考えました。

国策や国益だけで議論される核兵器問題も『個人』に注目すると、その非人道性や人権侵害の歴史がよく分かります。国際機関で学んだ『国境をこえた平和』を、核兵器廃絶を訴える上でも活かしていきたいです。

平和教育の出前授業海外実践！～ジュネーブ編～

酒井 環

4月25日、28日にジュネーブ日本語補習学校にて、（平和教育の出前）授業を行いました。子どもたちが、73年前の被爆の実相や現代の核問題を知り、考えることに照準を置き授業を構成しました。

“73年前の出来事は、自分たちとどう関係しているのかな？”という質問をした際、「自分のおばあちゃんが戦争で辛い思いをしたから私にも関係があると思う」や「お父さんが国連で武器に関する仕事をしてるから関係があると思う」などの答えをもらいました。授業を通して、子どもたちは核兵器問題を他人事ではなく、自分事だと感じているようでした。

今回の授業実践で、ジュネーブに暮らす子どもたちだからこその考えを聞くことができました。真剣に考える子どもたちの姿に、私たち自身が刺激を受け、とても実りある時間となりました。

国境を超えていく若者の想い

福井 敦巳

会議には各国から多くの学生が参加していました。7つの団体の協力の下、会議の中で若者代表として声明文を発表しました。

最も印象に残ったことは、『ヒバクシャの想いが世界に共有されている』ということです。異なる文化や価値観を持つ学生との議論の中で、「ヒバクシャの想いを組み入れたい」という声、核兵器に安全をゆだねていることへの不安、一向に進まない核廃絶に対する苛立ちなど、被爆者や核兵器に対する世界の若者の想いを感じました。

このように、声明文の作成を通して、『原爆の記憶』を広島や長崎にとどめるのではなく、国境を超えて『人類の記憶』にすることが大切だと感じました。国境を越えて、核廃絶への想いを共有する架け橋になっていきたいと思います！

AFTER THE TRIP （帰国後）

それぞれの想いをツナグ

三浦 大輝

帰国後、私たちは『多くの人への経験の共有する』を念頭に活動しています。活動報告会をはじめ、図書館での写真展の開催や全国の教育機関への出前講座を行っています。他にも原爆資料館でのアート作品の展示や会議期間中に行ったプレゼンの国内実施など、経験を形として残したり、多くの人に伝えたりする活動を実施しています。私たちがジュネーブで、何を見て何を感じたのか。それらの経験を共有する中で、より多くの方の核兵器問題への関心を高めていきます！